

南明勢力の日本乞師と朝鮮・対馬の情報交渉について

九州大学大学院人文科学府東洋史学研究室 博士後期課程2年（助成時）

同上 博士後期課程3年（現在）

劉 明鏜

研究の背景と目的

一六四四年北京陥落以降、残明勢力「南明」は清朝へ抵抗し続けた。これらの南明勢力は日本に使節を派遣して軍事的救援を求めた。これを「日本乞師」と称する。

南明勢力の日本乞師については、特に一六四五年舟山の周崔芝による乞師や、一六四六年福建の鄭芝龍による乞師などについては、漢文史料と『華夷変態』などの和文史料を併用して、日中学者は詳細な検討がなされており、以上二回の乞師事例の経緯や日本側の対応に関する検討が進められた。

これに対し、一六四七年福建福州から出航した明宗室の安昌王や、同年にすでに覆滅した隆武政権を奉じ、舟山群島を拠点として武将黄斌卿が使節を派遣して行った乞師については、漢文文献の記載には矛盾が多く、明示的な和文記録にも残されておらず、従来の研究では実態が明らかではなかった。

さらに、従来南明政権の日本乞師については、おもに日中関係史の文脈から検討されている。ただし日本乞師の情報は、琉球・朝鮮などの周辺諸国や伝わっており、対馬のような境界地域がその情報の伝達に重要な役割を果たしていたが、南明情報をめぐる朝鮮・対馬の交渉の動向については、従来の研究ではほとんど論じられていない。また南明の日本乞師に対する清王朝の情報収集と反応・対応も検討されていない。

よって本研究では、中国・朝鮮漢文史料のほか和文・オランダ史料も併用して、従来実態が十分に明らかではなかった、一六四七年の日本乞師の経緯について考察し、南明使節来航の情報を受けた幕府の対応についても検討する。その上で、従来注目されていない日本乞師をめぐる朝鮮・対馬の情報交渉についても検討を加え、東アジア海域史の視野から、南明の日本乞師をめぐる国際的な交渉・動向を解明することを目標とする。

研究活動

- ①課題に関連する研究資料を購入して参考した。
- ②浙江舟山市博物館・東京尊経閣文庫・対馬博物館などで史料調査を行った。
- ③学会報告と論文発表を積極的に行った。

研究成果と実績

<論文発表>

- ①劉明鏜「徐孚遠『釣璜堂存稿』中所見南明的日本乞師及舟山統治」『寧波大学学报（人文社科版）』38巻6期、2025年11月（査読付き）

- ②劉明鏜「明末清初舟山地区的対日貿易」『明清史評論』12号、2025年12月（査読付き）
- ③劉明鏜「南明海上勢力の頒曆と正朔—尊經閣文庫蔵『隆武三年曆』をめぐって」『東方学』151輯、2026年1月（査読付き）

<学会発表>

- ①劉明鏜「明末清初舟山的地域秩序与対日交渉」・「東アジア文化交渉学会第17回国際学術大会」・浙江工商大学・2025年5月10日。
- ②劉明鏜「南明海上勢力の頒曆と正朔—尊經閣文庫『隆武三年曆』をめぐって」・「日本明清史夏合宿2025」・福岡大学・2025年8月27日。
- ③劉明鏜「徐孚遠『釣璜堂存稿』に見る南明の日本乞師と舟山支配」・「日本中国学会第77回大会九州大学」・九州大学・2025年10月13日。
- ④劉明鏜「南明弘光政権の海禁解除与長崎唐船貿易」・「『明清江南の文献、社会与文化』学術研討会」・復旦大学・2025年10月18~19日。

研究結果

一六四七年、浙江・福建の南明勢力は二度にわたり使節を派遣し、日本に軍事的救援を求めた。まず同年四月一四日に明朝宗室である安昌王は使節として長崎に入港し、唐通事と交渉したが、成果を挙げることができず、二四日には長崎を出港して浙江舟山へ帰還したのである。後に五月二九日、舟山群島を支配した南明武将・黄斌卿はまた使節を派遣して乞師したが、やはり成果を得なかった。ただし幕府は特に長崎貿易を禁じておらず、南明勢力の海商たちは依然として長崎に来航して物資を交易でき、清朝に抵抗するための軍費・物資調達を図ったと考えられている。

また、東京の尊經閣文庫には舟山南明勢力が頒行した『隆武三年曆』一冊が収められている。『隆武三年曆』は同年内に、南明の正朔を奉じる舟山や厦門などの華人海商が長崎に来航した際にもたらした可能性が高い。あるいは日本乞師の使節船がこの曆書をもたらしたとも想定しうる。南明勢力は頒曆を通じて清朝に対する自らの「正統性」を主張し、明朝の「正朔」を奉ずる姿勢を日本や東アジア海域にも示したのである。

なお、南明勢力による乞師の情報は、東アジア海域を通じて広く伝播した。幕府は一貫して消極姿勢で対応したが、情報収集には積極的に行った。また対馬藩を経て朝鮮に伝わった南明の日本乞師情報は、清朝にも報告され、各主体により誇張・利用された。朝鮮と対馬藩は外交交渉の材料とし、清朝は日本介入を警戒して対日情報収集を強化した。

総じて本研究は、南明・日本・朝鮮・清朝を結ぶ情報の流通と外交的駆け引きを通じて、明清鼎革が中国内部の政権交替にとどまらず、東アジア国際秩序の中で進行した過程であったこと、また一七世紀中期の東アジア海域における南明海上勢力の活躍と、それに関連する国際交渉の実態を明らかにしたのである。